

瀧神社は、どこらへんにあったのか（その 2：『雲陽誌』を手掛かりに）

前回に引続き、雲陽誌を手掛かりに、瀧神社のお社（やしろ）の位置を、探索してみたいと思います。

現在では、龍頭が滝を訪れた人は、まず滝を眺めてから、左側にある、石の階段を上ります（図 1 の①）。石段を上りきると、広場に到着します。その広場から降りて行くと（図 1 の②）、滝の裏側に着き、そこには頭上に大きな岩石があり、滝の落ちる水を間近に見ることができます（図の③）。これが、現在の龍頭が滝の散策コース、といったところです。

雲陽誌は、龍頭が滝について、「瀧坂をのぼり華表の前より岩下にいたる この所を龍頭と称して瀧あり」と記しています（下記赤字の部分）。「華表」は、かひよう、と読み、鳥居（とりい）のことです。ここで、龍頭が滝の石の階段の坂は「瀧坂」と呼ばれていて、その「瀧坂」を登りきったところにある広場に、鳥居があったと仮定してみましょう（図 1）。

そのうえで、現在の龍頭が滝の散策コースと、雲陽誌の記述とを重ね合わせてみると、「華表」を除けば、このふたつは、ぴったりと一致します。ということは、先ほどの仮説は、ほぼ正確で、石の階段を上りきったところにある広場には、鳥居（華表）があったことは、まず間違いのないものと思われます。鳥居があれば、瀧神社のお社も、そのすぐ後ろにあったはずです。雲陽誌は、享保 2（1717）年に成立したとされていますから、今から 300 年前には、鳥居と瀧神社のお社が、龍頭が滝に向かって、左上のほうに見えたことでしょう。

また、「岩下にいたる この所を龍頭と称して瀧あり」とも記されています。「龍頭」と呼ばれる場所（図 1 の③）を、滝壺に広がる河原から眺めると、大きな洞窟の入り口に見えます。「龍頭」と呼ばれていたのですから、この洞窟に「龍」が住んでいて、その洞窟の入り口（図の③）から、龍が頭を出す、と人々は考えたのではないのでしょうか。

大正 8 年に発行された、『名勝史蹟及天然記念物』という本によれば、島根県下の洞窟や岩窟には、「大神の琴」があったとか、「大国主命」「大蛇」「鬼」などが住んでいた、という伝承があるようです。昔の人々は、洞窟に対して、畏敬の念や、恐怖のイメージを抱いていたことが、このことからわかります。

現在は、龍頭が滝は、名勝地、観光地として紹介され、訪れた人は、その自然の美しさに感動します。しかし、300 年前の人たちや、それよりもっと前の人たちにとっては、龍頭が滝は、「龍」といった超自然的なものを感じ、畏敬の念を抱き、手を合わせたくするような場所だった、と考えられます。

（以下、次回に続く）

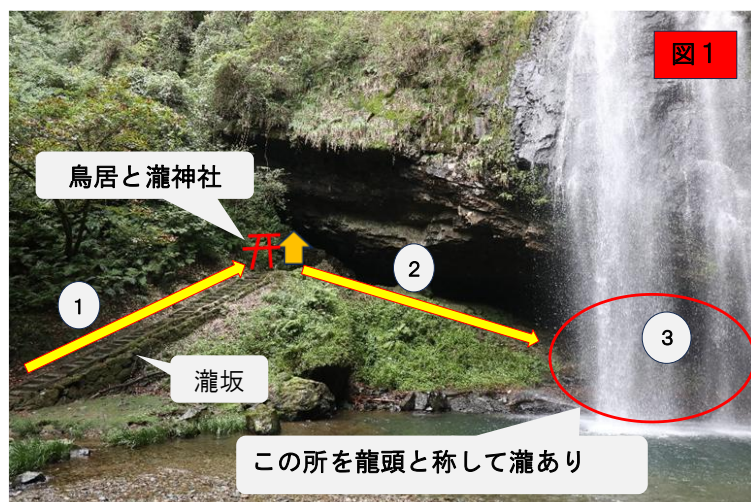


図 1

『雲陽誌』（抜粋）
龍頭瀑 掛合より須佐への通路左の方
瀧坂をのぼり華表の前より岩下にいたる
この所を龍頭と称して瀧あり 高さ三十三尋潭の深さもまた然りなり
（中略）
此邊幽壑の中に瀧明神の社石地蔵を安置す 青苔壇にのぼり老杉傍に生り